

81 前壁心筋梗塞における運動負荷心電図ST上昇指数の意義について

岡野光志、大鈴文孝、勝然秀一、背妹正夫、青崎登、中村治雄(防衛医大 第一内科)、穴戸敏彦、末岡貞登、竹中栄一(同放射線科)

対象は前壁心筋梗塞発症2箇月以内に運動負荷 ^{201}Tl 心筋SPECT及び冠動脈、左心室造影を施行された急性例(AMI)25例と2箇月以後の陈旧例(OMI)15例である。ST接合部より0.08秒後のSTトレンドグラムでST上昇面積をQ波を有する全誘導で算出、総和し ΔST とした。AMI群でDS(安静時defect score)と ΔST 及びEFとの相関関係は $r=0.167, n=15; r=-0.636, p<0.001$ となり、OMI群では $r=0.717, p<0.01; r=-0.748, p<0.01$ であった。修復機転が完了する2箇月前後でAMIとOMIに区別し、OMIでは ΔST は梗塞の範囲、程度と正相関し壁運動異常を反映する指標となるが、AMIでの ΔST には相関性がなく今後の検討を要すると思われた。

82 慢性期下壁心筋梗塞症患者における多単極胸部誘導運動試験のST変化の検討—運動心筋シンチグラフィとの対比—

佐藤昭彦、都築實紀(大同病院循環器科)、加納浩一、鈴木晃夫、松島英夫、横田充弘、林博史(名古屋大学第1内科)、外畑巖(藤田学園保健衛生大学内科)

慢性期下壁心筋梗塞症患者53名に多単極胸部誘導運動試験を施行し、ST変化を運動心筋シンチグラフィ(Ex-Tl)の所見と対比検討した。Ex-Tl上虚血出現例で97.3%、非出現例では25%にST低下を認めた。Ex-Tl上のIschemic scoreとST低下誘導数との間に有意な正相関があった。R波補正を行った最大ST低下部位はEx-Tl上の虚血出現領域に特徴的な分布パターンを示し、複数領域に虚血出現例ではより高度な虚血領域を反映した。以上、多単極胸部誘導運動試験のST変化は残存虚血の有無および虚血領域の推定に有用であった。

83 TL-201負荷心筋スキャンにおける負荷心電図およびタリウム灌流分布との比較検討

松尾剛志、西村恒彦、植原敏勇、林田孝平、千葉 博、三谷勇雄、山上英利、住吉徹哉*、土師一夫* (国循セン放診部、同心内*)

TL-201負荷心筋スキャンにて負荷心電図(ECG)とタリウム灌流分布(TL)の不一致例について詳細に検討した。対象は、狭心症を疑い冠動脈造影を施行した159例(①正常冠動脈例:67例、②有意冠動脈狭窄例:92例)である。ECG・TLの冠動脈病変検出率は、それぞれ66%・76%であった。①において不一致例を37%、両者とも偽陽性例を9%に認めた。これらの原因として、血管攣縮性狭心症・肥大型心筋症・LVHなどがあげられた。②において不一致例を27%、両者とも偽陽性例を15%に認めた。これらの原因として、75%狭窄病変・LCX病変・LVH・多枝病変などがあげられた。